

「外に失いしものを、内にて取り戻さん」考

——我が国におけるデンマーク紹介の常套句が固定的に使われることを考える——

村井 誠 人

一

「Det sagde han ikke (それを彼は言わなかった)」の見出しが、デンマーク最大発行部数を誇る月刊誌『サムヴィアケ *Samvirke* (「協同」の意)』の二〇〇八年十月号の一〇二頁に掲載されたことに注目する。その筆者は作家・ジャーナリストのケル・ハンセン (Kjeld Hansen 一九四七—) であり、デンマークにおいて「学校の子供たちが何世代にもわたって諺^{ことわざ}んじてきた」(s. 102) 「外に失いしものを、内にて取り戻さん *Hvad udad tabes, skal indad vindes*」のフレーズをエンリコ・ミューリウス・ダルガス (Enrico Mylius Dalgas 一八二八—一九四) のものとする。常識^{じょうしき}に對する反論である。このフレーズが一八六四年の敗北のち経済的に立ち上がっていかうとするデンマークの復興を象徴的に語るものであることには異論をはさむものではないものの、ハンセンは歴史家リーゼゴー

「外に失いしものを、内にて取り戻さん」考

(Bo Lidegaard 一九五八—) によつてその一年前に同誌に掲載された「小国 *Småstat*」(二〇〇七年八月号) と題された論文の内容を問題視した。リーゼゴーは本文をこのフレーズを最初に置くことをもつて始め、そこでは具体的にその発言者をダルガスとは明記しないものの、三頁目にヒースの原野に立つダルガスの肖像画を配し、キャプションに「スリースヴィ戦争時の工兵士官。ユトランド (ユラン) のヒースの開墾のため一八六六年からヒース協会のリーダーとなる」(s. 55) と解説した。結果として彼が文頭後に記した「一八六七年以来のその短くて簡単な詩は、どこに行つても耳に入り、その時代の文脈を表現するもう一つのもの」(s. 52) という文章に「ヒース開墾者」ダルガスの存在が、常識的に「デンマーク人読者には結び付けられていくことになる。ハンセンの手記の最後には、雑誌編集者側の挿入文として、リーゼゴーと、彼が分担執筆している二〇〇七年発行のサムヴィアケ社版『デンマーク史——墳墓からグローバル化まで—— *Danmarks historie - fra gravhøj til globali-*

sering —』の編者ラスムス・ダルベア (Rasmus Dahberg 一九七
七―) の両者がハンセンの指摘に従うことを受け入れ、将来、同書
が改訂される際、リーゼゴの章が書き改められることになること
している (s. 103)。

実際、その短い詩のフレーズはダルガスのものではなく、一八七
二年の北欧産業芸術博覧会 (Den Nordiske Industri og Kunstst t-
ling i K benhavn) がコペンハーゲンで開かれた際、記念メダルが
発行され、そのメダルの裏側の縁を囲むように首都周辺の工業化の
掛け声ともいべき作家ホルスト (H. P. Holst 一八一―一九三) の
言葉が、「いかなる喪失も再び代償は得られ、外に失われしものを、
内にて取り戻さん For hvert et Tab igjen Erstatning findes : Hvad
n d tables, det maa indad vindes.」と刻印され、そのうちの後半
の部分がそれである⁽¹⁾。そのこと自体は決して「秘話」でもなく、教
養人には知られていたことではあったが、彼らとはいささか無縁の
デンマーク独特の「学校教育の現場」において、第二次スリース
ヴィ戦争敗北後の「失われた領土」を、戦わずして国内で補うかの
ような目覚ましい復興を象徴するフレーズとして、それは時間の経
過とともに好んで用いられてきたのである。そしてそれがダルガス
の口から出たフレーズとして語られていくことになる。

二

しかし、この問題は我が国にきわめて大きな影響を与える可能性
がある。じつは、筆者はケル・ハンセンのその指摘の二〇年以上前
から、この問題を同様に語っていた。一九八一年四月二七日に北欧
文化協会の月例会において「デンマークとヨーロッパ」と題してデ
ンマークのこの問題にかかわる報告をおこない、一九八三年十一月
に雑誌『歴史と地理』(山川出版社) 三三九号で「『デンマルク国の
話』と我が国のデンマーク像の変遷」を論じ、二〇〇一年デンマー
ク、コリングフース城博物館の企画展「デンマーク史二千年におけ
る歴史的ヒーロー Den danske helt i 1000  r」展の web サイト掲載
論文、"Dalgas og S n : Danske helte i Japan" (「ダルガスと息子
——日本におけるデンマークの英雄——」) を発表しており——『北
欧史研究』第二一号 (バルト＝スカンディナヴィア研究会、二〇
〇四年) に全文再録——、それらのテーマのなかで、「外に失いし
ものを、内にて取り戻さん」のフレーズがダルガスによるものでは
なく、ホルストによるものであることを述べ、そこから生じる問題
として、我が国における内村鑑三 (一八六一―一九三〇) によるダ
ルガス紹介の特殊日本的な問題の所在を論じてきた。また、一九九
六年にも、一般読者を対象とする百瀬宏・村井誠人監修『読んで
旅する』世界の歴史と文化 北欧 (新潮社、一九九六年) 内の「祖
国復興の英雄? ダルガスの実像と日本での受容」(六九―七一
頁) でも、明確にその点を論じており、それらで言及したことが我が
国が国のデンマーク紹介者たちに大した影響を与えた形跡がなかった⁽²⁾。

じつは、むしろ、そのことに意味がありそうである。

我が国では、日露戦争に非戦論を唱えた内村鑑三が、『デンマルク国の話』を語ったのが本稿に関わる問題の始まりである。⁽³⁾一九一一年（明治四四）年一〇月二二日に東京柏木の今井館で、実在したダルガスの伝記に「其の剣を打かへて鋤となし、其の槍を打かへて鎌となし」（ミカ書四章三節）た「信仰の力」を織りなして「此の世の事に就いてお話し」した『聖書講話』を内村が行ない、ダルガスに敗戦後直ちに「彼の同僚が絶望に压せられて其の故国に帰りし時に」「然しながら我等は外に失ひし所のものを内に於いて取返すを得べし、君等と余との生存中に我等はユットランドの曠野を化して薔薇花咲く所となすを得べし」と語らしめ、「此の工兵士官に預言者イザヤの精神がありました」と平和主義者ダルガスを紹介している。そして、内村はその『デンマルク国の話』の中で、一言たりともダルガスが友人たちと一八六六年に組織した「デンマーク・ヒース協会 Det danske Hedeselskab」の存在、自らがその会長（在職一八六六―一九四）になったことなどについて触れることはなく、ダルガスと息子「フレデリック」とのきわめて特徴的な父子によるヒース地帯でのモミの植林に関わる苦労話で終始した。では『実在した』ダルガスの実際の在り様はどうであろうか。

上記ケル・ハンセンが記しているように、ダルガスがいかにその有名なフレーズに関係がないかという根拠は、一世代以上にわたってヒース協会の機関誌の編集人であったスコスホイ（Harry Skodshøj

一九〇三―一八九）の著した伝記『E・M・ダルガス E. M. Dalgas』（一九六六）⁽⁴⁾の記述にあるのだが、筆者も『デンマルク国の話』と我が国のデンマーク像の変遷の中で、まさに同じように同書を根拠として、ダルガスの実像を紹介してきたのである。そしてそれゆえ、御園喜博がその著『デンマーク』（東京大学出版会、一九七〇年）の記述の中で、スコスホイ自らによって『E・M・ダルガス』を贈呈されたと記しながらも、その内容がその著のどこにも反映されていなかったことは、我が国のデンマーク理解の道程に象徴的な出来事でもある。御園はその著書の中では内村鑑三の『ダルガス』を美文をもってなぞったばかりであった。

スコスホイの『E・M・ダルガス』等を参考にしながら、一八六四年の敗戦直後にダルガスが平和主義的な意志の表明としてあのフレーズを口にはできなかったであろう状況を確認しておきたい。

敗北後、デンマーク政府を始め、首都の人々の多くは、戦勝国同士が争うことになる普墺戦争（一八六六）、オーストリアを退けドイツ統一を目指したプロイセンによるフランスを相手とする普仏戦争（一八七〇―七二）に際して、失われたスリースヴィ内のデンマーク語が語られている地域のデンマーク「復帰」の可能性を求め、⁽⁵⁾「参戦」の機会を模索したのである。デンマークに立憲君主制（一八四八）と自由主義憲法（一八四九）をもたらした市民層を代表する政党「ナショナルリベラル de Nationalliberale」が戦後も国家の指導的地位に就いていたが、前者の戦争では、海軍力に弱点の

あるプロイセンに加勢し、「恩を売る」ことをもくろみ、後者の戦争では北部スリースヴィのデンマーク復帰をほめかすナポレオン三世 (Napoleon III 一八〇八—七三) への加担をもくろみ、外交交渉寸前まで歩を進めた。どちらの戦争でも現実にはデンマークは動かず、特に後者では予想以上に早く戦局が動き、一八七〇年九月ナ

ポレオン三世自身がプロイセン軍に捕らえられるというセダン (スダン) の戦いの報で、デンマーク政府も首都の人々も落胆し、同時代人ブランデス (Georg Brandes 一八四二—一九二七) が彼らを揶揄して「セダンの人々 Seditious⁽⁵⁾」と呼んだ。ダルガスもその時代風潮の中におり、兵学校入学の前後にナショナルリベラルを中心とした「スカンディナヴィア学生運動」から大きな影響を受け、交友範囲にもナショナルリベラルの国会議員もおり、スコスホイは一八九一年のダルガスの発言を次のように紹介している。「普仏戦争時の一八七〇年、短時間であつたが失われた領土を取り戻そうという我等の希望が高まつたが、フランスの大敗でその希望は再び沈み、国内の嘆きは一八六四年に我々自身が敗れた時よりも大きかつたと思う」と (s. 83)。まさに、それは「セダンの人々」の感覚そのものである。また、その復讐心と国防の意欲にあふれた首都の雰囲気は、一八七三年四月にデンマークを訪れていた岩倉具視 (一八二五—八三) 率いる新生日本の遣欧使節団が目にするものでもあつた。その際、随行員久米邦武 (一八三九—一九三二) は、我が国のデンマーク紹介の文章のなかではきわめて例外的な、好戦的⁶ デンマー

クを紹介している⁽⁶⁾。さらに、スコスホイはダルガスが一八七〇年代「ヒース問題への関心のほかには、国防問題に大きな関心をもっていた」と記し (s. 192)、特に右翼党のエストロプ (J. B. S. Estrup 一八二五—一九一三) 政権による国防政策に共感をもっていたとも記している (s. 193-194)。

また、ケル・ハンセンは、スコスホイの著作によって「既に一九六六年にデンマークの景観に関わる二つの大きな神話が崩壊した」 (s. 103) とし、自らの主張の補完として『E・M・ダルガス』内の第三章の書き出しを、「(慣用的な) 良き叙述が歴史家の頭を歪めてしまふとき」と題した web 上の評論の中でリーゼゴアの提起した二つの神話に引導を渡すものとしてそのまま引用した。本稿でも、きわめて有効であるからここに引用しておこう。

「さまざまなダルガスに関する伝記の中で、ダルガスを表舞台に登場させたのは一八六四年の敗戦と南ユトランドの喪失であり、デンマークの屈辱に対するダルガスの大いなる苦悩が、ひとつのビジョンとして、ユトランド (ユラン) のヒース原野が国内において国土をより大きくすることを可能とし、幾分かでも敗戦によって受けた傷を癒しうるだろうという確信をダルガスに与えた、とする意見を私たちは目にする。しかし、そういったものは存在しない。確認できる限りの書簡においても、またそういった主題を意図的に扱って表現された当時の彼の論説においても、存在しないのである。いかに美しくかつ愛国的なものであろうと、またいかに彼の心を動

かしたであろうとして感情的にふさわしいものであったとしても、そういった考えを彼の存在のうえに重ね合わせるのは非論理的であり、全く別の意味でダルガスはユトランドのヒース地帯の改善がすでに大幅に進んでいたことを認識していた。ご存じのように、デンマークにおけるヒースの大規模な開墾作業は、一八六四年以前に行なわれていたことを思い起こしていただきたいし、それは一八三五年から一八六〇年の間の時期であった」(E. M. Dalgas, s. 83)。また、当時、仏・蘭・独およびスコットランド等、全欧州的スケールでヒースの開墾が行なわれていて、それが決してデンマーク固有の現象ではありえなかった(s. 83)。それゆえ、ヒース地帯に植林の経験がある司法官モアヴィレ (Georg Morville 一八一七—一九〇四)らと工兵士官・幹線道路敷設の専門家として職業柄ユトランドの地質を熟知したダルガスとが一八六六年に組織した「デンマーク・ヒース協会」が、平和主義の賜である必要はなかった。幹線道路敷設の管轄が陸軍を離れたとき、ダルガスは「軍籍」を維持しながら北部ユトランドの道路敷設の道路監督官となり(一八五九)、ヒース協会でも会長となったものの無給のままであり、給料はつねに軍から支給され続け、最終的には「中佐」まで昇格している。彼は、農民たちから「大尉」(Kapitän)と常と呼ばれ、その指導力・行動力・知識をもって精力的に初代会長の職をその死まで務め、その意欲的な激務が彼の健康を蝕み、六五歳で世を去っている。

三

彼の息子のうち、成人したのは三人で、長男のクレスチャン (Christian 一八六二—一九三九)、三男のフレズレク (Frederik 一八六六—一九三四)、五男のエアネスト (Ernesto 一八七一—九九)であり、クレスチャン (クリスチャン) は父エンリコの死後、就任に至るまでは紛糾したものの二代目のヒース協会の会長となり、フレズレクはコペンハーゲンに出て「王立陶器工場」(我が国では、「ロイヤル・コペンハーゲン」として知られる)の社長となり、エアネストは作家となっている。この「ダルガス父子」関係の記述に、不可解な特殊⁽⁵⁾、日⁽⁶⁾、本⁽⁷⁾的現象が現れる。

デンマークと日本人の関わりを論じた最近の雑誌記事、松前紀男「デンマークに魅せられた日本人」(『Excellent DENMARK Loving』第四号、デンマーク大使館、二〇〇八年(日本語誌))を見ても、その書き出しは「一八六四年、デンマークはドイツ(正確にはプロイセンとすべき(筆者))・オーストリアの二強国と戦って敗れ、南部の肥沃な二州(数で言うならば三(筆者))を割譲した為に国力を失い、国は悲境に陥りました。その時、エンリコ・ムリウス・ダルガス(一八二八—一八九四)が、植林によって荒野を肥沃な地に変え、ニコライ・フレデリック・ゼベリン・グルントヴィー(一七八三—一八七二)は、各地の農村にフォルケホイスコーレ(国民高

等学校」を創設して「その時」、グロントヴィがそうしたと単純に言えるのか疑問（筆者）、教育による国の再生を訴えました。このデンマーク再建への努力は、世界の注目を集めました。（六〇頁）で始まり、この記事の中でダルガスには人物解説の註がつく。それを再録すると以下のようなになる。「フランス系のデンマーク人で工兵隊の軍人。ユトランド（Jutland）の荒野を沃野に変える大計画を立て、ピーターホルストが作った詩の一節を借りて、『外に失いしものを内にて取り返すべく、ユトランドの曠野を薔薇の花咲くところとなすを得べし』と、デンマークが剣をもって失ったものを鋤をもって取り返そうとしました。この事業を受け継いだ長男のフレデリック・ダルガスは、植物学者でした。彼は樅の生長について、新事実の発見、デンマークのユトランドの荒地挽回の難問題を解決しました」（六五頁）。そこには、ホルストが一八七二年に公表したフレーズを一八六四年という八年も前にダルガスが借用していたというデフォルメが見られるものの、あとは語彙も含め内村の『デンマーク国の話』の採録であり、実在しない「長男のフレデリック」にまで言及し、それをエンリコの人物解説註に持ち込む結果となった。そこでは、デンマーク語で記された人名事典などにあたって註記が作成された痕跡もなく、我が国への紹介以来百年の時を迎えようとしている内村の「ダルガス像」を再現しようとするものである。デンマークにおけるダルガスに関わる「神話」に、長男クレスチャンをさておき、フレズレクの名を用いての「父子物語」がもし成立

していたとするならば、我々はそれをどのように考えるべきであろうか。

内村鑑三がいかにしてこの物語の資料を入手し、書き上げたかは、謎に包まれていた。内村の無教会主義を継承する人々の基督教政治社会問題研究会の月例会の場における『デンマーク国の話——信仰と樹木とを以て国を救ひし話——』の「研究座談会」と銘打った『独立』十四号（一九五〇年）誌上の掲載記事が謎であった状況の一端を伝えていた。内村の生前を熟知する無教会信徒十二名による座談会だけに、その内容は貴重である。その中で司会の鈴木俊郎が「なお、内村先生はこの『デンマーク国の話』を何によつて書かれたものか、これまでいろいろ注意しているのですが、どうも発見することができないのです。何かご存知でしょうか。」と尋ね、それに答えて植物学者の大賀一郎が「私も何であつたかわからないのです。先生のことだから、本をよくお読みになつたから、雑誌なんかをお読みになつて、その精神を取つて、『大モミ』『小モミ』とやつちやつたのじゃないでしょうか」と答え（一八頁）、さらにそれを受けて、医師の湯沢健が「これは私の想像ですが、先生はこの『デンマーク国の話』を『聖書之研究』に載せられたのが一九一一年明治四十四年の十一月です。なぜ先生がこういうものを書かれたのかということを一所懸命に読んで考えたのです。……ただいま申しました『聖書之研究』の十一月号には『デンマーク三景』という写真が載つていて、『ハウ・アイ・ビケーム・エ・クリスチャン』（余は如

何にして基督信徒になりし乎」をデンマルク語に訳したデンマークのマリア・ウルフ女史という女性の写真もそのなかにあるのですが、おそらくこの人から何かの材料を先生が得られたのじやないかと、私は想像するのです。」と、証言している（一八一―一九頁）。また、無教会主義の信徒の立場から高木謙次が、『デンマルク国の話』の「岩波版の解説で鈴木俊郎氏は『用いられた資料等については：詳かにする途をもちません』といわれる。そこに興味をもち、明治四十二、三年ごろに刊行された内務省地方局訳『丁抹の田園生活』（ハガード著）などに一つの手掛りがあるまいかと探しているのであるが、今のところ入手できない」と一九七九年に述べており（『福音と歴史』八号）⁹、また、彼が引用した一九一九年の沖野岩三郎の雑誌『雄弁』における文章の中で、「又彼（内村）は西洋人の著作を翻訳しない」（三六八頁）というものも、内村の「物書き」としての立場が明確に規定されていて興味深い。

『デンマルク国の話』の文中において内村がダルガスの混植法を説明する際、「大モミ」を「ノルウェー産の樅」としている点から一つの推理が浮かんでくる。すなわち、林学の専門家である元宇都宮高等農林学校教授、中山博一の調査により、デンマーク語では *stran* とされる「大モミ」はドイツ・トウヒ (*picea excelsa* [Tink]) であるとされ（『独立』一八号（一九五〇年）三六頁）、内村はそれを表現するのに「ノルウェー産の樅」としているが、英語では *Norwegian spruce* と記されることから、内村が参考としていた

「外に失いしものを、内にて取り戻さん」考

「種本」は、英語で書かれたものであることがわかり、実際、坂本勇が「デンマーク国立事業資料館」保管のマーリア・ヴォルフ宛ての内村の書簡（ヴォルフによる筆写）から内村がアメリカの雑誌を資料としていたという証拠を見出している¹⁰。

そして、中山が言うように、「こう考えてくれば、此のヤママツとドイツ・トウヒの混植は、極くありふれた組み合わせであり特別な発見とは思われない。重要樹種の生長を助けるために混植せられる樹を林業上『肥料木』と言っている。さらに憶測を許されるならば、ちようど千葉の片隅に松と杉の混植法がいつとはなしに行われて来たように、デンマークの何処かで小面積に実行されているのをダルガスが発見・観察し、これがダルガスの頭に天恵として閃めき、それを取り入れ強力に推し進めて行ったのではないだろうか。私はこれによって、決してダルガスの事業を低く評価しようというのではない。ただ自分の専門とする林業の立場から考えてみたのである。：最後に、『小もみ』を切って『大もみ』の生長を助けたという点であるが、これは林業的に見れば『間伐』の問題であって、：植えた時のままの本数をそのままにしておけば、根や樹冠が互にふれ合って、拡る余地がないが、之を間引いてやれば、残った樹木は生長範囲が広くなって、養分を余計に取り、太りが早くなるのである。切るのは『小もみ』だけでなく、或る程度になれば『大もみ』も切らなければならない。：（内村）先生の書かれたのを讀むと、『小もみ』の伐採が『大もみ』の生長に不思議な現象を起こしたように

見えるが、多分奇現象を現わしたのではなく、本数過密のために生長がおとろえたのが、間伐をしたために、残っていた樹木が勢を得て、生長が旺盛になったのであらうと思われる。…此の『デンマルク国の話』は科学書ではない。植物学を学ばれた先生は多分上述したようなことはお気付きのことであつたと思う。併し、敢てかく書かれたところに先生の異なる着眼点があつたのである。如何なる批評にも超然として、いつまでも生きて日本人に迫るであらう」（三八頁）。

上記の中山博一の指摘は極めて重要である。すなわち、デンマーク・ヒース協会の行なつた植林において風の強いユトランドで防砂・防風林としてのヤママツ *bjergfyr* とトウヒ *brun* の並植法は、デンマークで出版された書物などで我々は簡単に目にする⁽¹¹⁾ことができる。現在までのところ内村が『デンマルク国の話』の主題として描いたようなダルガス父子二代にわたる苦勞話の根柢を筆者は資料として見出しではないが、中山が記すようにその並植法自体が何ら林学的に特殊なものではなく、その「発見」自体がダルガス父子に特別に降り立つた神の恩寵ではないのであるから、内村にそれをわざわざ書かせた根柢は何なのであらうか。あるいは、完全な内村の創作なのか。内村はこの並植法をめぐる「デンマークの農夫ら」とダルガスのやり取りを「恰もエジプトより遁出^{のがれい}でイスラエルの民が一部の失敗の故を以てモーセを責めたと同然でありました、然し神はモーセの祈願^{ねがひ}を聴き給ひしが如くにダルガスの心の叫^{さけび}をも聴

き給ひました、默示は今度は彼に臨まずして彼の子に臨みました、彼の長男をフレデリック・ダルガスと称^いひました」と、表現している。小ダルガスが、そこで「小もみ」を間伐すべきことを告げ、「大もみ」の生長を実現するストーリーを展開、「奇態なる植物学上の事実が、ダルガス父子によつて発見せられたのであります」と大団円を迎えることになる。内村がこのストーリーにおいて言わんとしたことのひとつは、「第三に信仰の実力を示します、国の實力は軍隊ではありません、…信仰であります、此の事に関して真理を語つた者は矢張り旧い聖書であります」ということであり、最後に「国家の大危険にして信仰を嘲り之を無用視するが如き事はありません、私が今日茲にお話し致しましたデンマルクとダルガスとに關する事柄は大に輕佻浮薄の經世家^{いまし}を警^{いまし}むべきであります」と結んでいる。すなわち、並植法に關する「奇態なる発見」を紹介、旧約聖書にある「イザヤ書」、「ミカ書」、モーセの「出エジプト」の逸話、「ヨブ記」、新約聖書の「マタイ伝」、「ヨハネ第一書」からの聖句をちりばめながら、實在^{じじつ}したダルガスの「現実めいたお話」をすることで聖書の講話を行なう、そこに内村の意図が存在していたようだ。

ただし、デンマーク最大の人名事典⁽¹²⁾には、エンリコの長男「クレスチャン・ダルガス」の項の解説に興味深い記述が存在することを筆者は見出している。クレスチャンは一八九四年の父の死によつて「息子である後継者 *kronprins*」として認知されてはいたものの、長年、

会長職をめぐって争った後、四八歳にして、すなわち一九一〇年に、「ただ一人の会長 enedirektor」としてのタイトルを飾ることができたと記され、その後の記述に、「林業人として父の路線を引き継いだ、ヤママツの扱いではそれを『切り倒す』ことを実施し、主役であるトウヒの枝の成長を維持させて『樹冠』を整えさせようと、進んだ。」と記されている。文脈上は、クレスチャンの商業主義的な一面を語るものであり、「(タール・木炭・木精・樹脂といった)木を原料とする製品の工業的利用も彼の業務計画」にあつて、それらがヒース協会をデンマーク林業界から孤立させる原因となったことなどが記されている。すなわち、時に関する記述がないものの、「ダルガスの長男」が、父の死後、「ヤママツ」の伐採にイニシアティヴをとったという事実はありえたのであり、内村が言う「若きダルガス」(それも、後述するように、内村のそれを再話した第二次世界大戦後の少年少女向けの書物の中では——さらに中学生用の教科書の中で、挿絵つきで——「一八歳のフレデリック」少年となるのだが)のデンマークを救うことになる「大発見」なるものが、時間も背景も全く異なる状況のなかで展開していたことは確かである。しかし、こうした状況から判断すると、『父子二代にわたる美談』がまったくの内村の創作である(——かつての筆者の見解——)と片づけるというわけにはいかないようで、上記の状況は彼が参考にした資料の内容がいかなるものであつたかを考える必要がありそうだ。

四

この内村鑑三の『デンマルク国の話』が、なぜ私たちのもとに、『本物の』デンマークの歴史事象として伝わってしまったのであるうか。それは、彼岸に存在したデンマークの一八六四年の『敗戦』が、此岸の我が国に一九四五年に『現実』となつて生じたからである。前述の研究座談会で、食糧公団総務局長渡辺五六の言葉が状況を見事に物語っている。彼は一九三一年に視察でデンマークを訪れ、それ以前に『デンマルク国の話』を読んでいたにもかかわらず、ただ漠然とデンマークを見て通り過ぎただけだったと述懐したうえで、七年間の上海生活ののち、敗戦の翌年一九四六年に帰国して、『早速この先生の『デンマルク国の話』を引っ張り出して読んでみました。ところが前に読みました時と違ひましてこれこそ本当に腸にしみわたつたような気持ちがありました。これこそほんとうに、先生は明治四十四年にお書きになつたのだが、敗戦後の日本の国民に遺言しておいてくださったものじゃないか、それを我々はただ封を切らずにおつたのじゃないか、という感じがいたしました。これこそほんとうに敗戦日本の国民のために遙か前途を見透して預言せられた先生の御遺言だというふうに感じたわけです』(一一—一二頁)と発言した。戦後教育は戦前の教育を担った人々をいわば排除した形で再出発し、平和主義のモデルとして『デンマルク国の話』

が将来の平和国家を担う子供たちに伝えられるべきものと考えられたようだ。その際、特にドイツ文学者の高橋健二が小学校六年生用の国語教科書の掲載を前にして行なったように、内村の創作した本文から、徹底的にキリスト教的信仰の色合いを抜き去り、換骨奪胎した「事実らしい」「ダルガス父子」のストーリーをさらに創り上げたのである。⁽¹⁴⁾したがって、内村が出エジプトのモーセの辛苦の体験に譬えた神の恩寵のもとでのダルガス父子の植林物語が、それを読む子供たちに、実際の歴史物語、偉人伝として届く結果となった。すなわち、内村の「信仰の実力」を示すための聖書講話が、敗戦を契機に平和裏に植林によって国家を復興させようとした父子二代にわたる実話然とした偉人伝となり、その時代にそのストーリーの洗礼を受けた者たちが、おとなに成長後、自ら作り出すデンマークのイメージに「ダルガス父子」の物語が原点として存在していることに気付くのである。

さらにもう一つ上記研究座談会において確認されたことがある。それは内村鑑三が『デンマルク国の話』を著した当時、その後の我が国の「デンマーク論」において欠かすことができなくなるグロントヴィ (N. F. S. Grundtvig 一七八三—一八七二) のことを内村自身が知らなかったことである。これは重要なことである。座談会では、司会者が「ところで内村先生が『デンマルク自生の自由信仰ありて』と言われている場合、新生デンマークの精神的指導者と言われるグルンドヴィの信仰のことを先生は知っておられたかどうか

か。」と言うと、『聖書之言』主筆の石原兵永が「これは疑問ですが……。」と答え(二二頁)、さらにしばらくしてまた司会の鈴木が「しかし、先ほども話が出たように、グルンドヴィのことは先生は知っておられなかったらうと思うのです。」と発言、大賀がそれを受けて「先生は御存じなかったらうと思うのです。あれば必ずお書きになると思われる人ですが、なにもありませんからね。」(二二頁)とある。『デンマルク国の話』を書きあげた際に、内村がグロントヴィを知らなかったことは重要な証言であり、したがって創立四七周年を迎えた年(一九八九年)の東海大学学内の後援会誌『東海』の新生入生歓迎号に掲載された以下のような記述は、驚くべきものである。新入生に対し、「これだけは知っておきたい：キワード：東海大学の歴史と精神」と題し、キワードとして松前重義総長・内村鑑三・グロントヴィの名を挙げ、その解説文に「松前総長は青年時代、内村鑑三の主宰する聖書研究会に参加、内村の講義に接し、神の啓示にも似た強い衝撃を受ける。当時、通信省の役人だった松前総長は、昭和恐慌を背景とした不安定な社会の中で人生いかに生きるべきか、という問題に直面していた。ここに解答を与えたのが人道主義に満ちた内村の講話であり、その著書『デンマルク国の話』などによって知ったグロントヴィの人間教育、精神教育の運動であった。」(二三頁)とある。しかし『デンマルク国の話』の中には、当然、グロントヴィは登場しようもないのである。

また、松前紀男の「デンマークに魅せられた日本人」内に掲載さ

れた内村の写真のキャプションには、「内村鑑三（写真左）は、デンマークの二人の偉人（グルントヴィーとダルガス）の活動を日本に紹介、多くの人に感銘を与えた。」（六〇頁）とあり、内村が『デンマーク国の話』を著した時点ではグルントヴィーを知らなかったのであるから、その内容はその後の時代に、相当にグルントヴィーの紹介に内村が関わっていったのだらうと想像せざるを得ないのだが、『内村鑑三全集』（新版、岩波書店、一九八二年）に目を注いでも、著作に関してはその状況を示すものを見出しにくい。グルントヴィーの名を冠したものは唯一「グルントウィツヒの如く」（一九二六年推定）と題した一文を見出すのみであり、それも旧友渡瀬寅次郎の死に接し、渡瀬の「丁抹流の、基督教の基礎に立てる農学校を起したい」という志をそこで記し、彼の名を「グルントウィツヒの名が丁抹に残るが如く、わが日本に残したいとの希望を述べ」（第三〇巻、一八三―一八五頁）ようとした追悼文である。また、オーヴェ・コースゴー（Ove Korsgaard 一九四二）が「有名な思想家、内村鑑三によって、デンマークとグルントヴィーは今世紀初頭以来、日本でも知られるようになりました」と一九九三年の共編本の序文（二頁）で述べているが、その論拠はなにも示されていない。渡瀬寅次郎の遺言に従って伊豆の久連にデンマーク式の「国民高等学校」が設立され、運営に内村鑑三、新渡戸稲造（一八六二―一九三三）らが協力し、その中心に平林廣人（一八八六―一九八八）がいた、と松前紀男が「デンマークに魅せられた日本人」のなかで記す

「外に失いしものを、内にて取り戻さん」考

とき（六四頁）、その平林の註解説に、「内村鑑三にデンマークにおけるグルントヴィーの重要性を教えたのも平林広人と言われている」（六五頁）と表現し、平林自身がデンマーク滞在から帰ってきたのは一九二四年なのであるから、内村が『デンマーク国の話』を記したときに、やはりグルントヴィーを知らなかったことがここでも裏付けられている。もちろん、久連の興農学園の設立前後から内村本人、内村の弟子、および彼らの周辺のものがグルントヴィーを発想者とする「フォルケホイスコーレ（国民高等学校）」に関わる学校設立・運営に携わって多大な貢献を我が国でしてきたことを否定しているわけではなく――この点は、まったくの事実として認識しているのだが――、筆者は内村とグルントヴィー、あるいは国民高等学校思想とを、時間的推移を捨象して安易に結びつけるべきではないと考え、ある種の時代状況からそうした「言われ方」が生じたことを認識すべきことが必要だと考えている。

五

実はダルガスとグルントヴィーとを並べたうえで「デンマーク」なる国を紹介することは、第二次世界大戦後のわが国の特有な現象である。なぜ、そうなったのかということを、一応押さえておきたい。グルントヴィーが我が国に紹介されていく文脈は、本来、まったくダルガスとは無縁であった。

「座談会」中に渡辺五六が吐露したように第二次世界大戦前は『デンマルク国の話』は内村の弟子であっても彼が「デンマークに行つていながら想い起すこともない」ほどであったのに（一〇頁）、ましてや一般に対してはほとんど影響をおよぼさなかった。一方、前述の坂本勇によれば、「日本とグルントウイあるいは国民高等学校との付き合ひは、明治三十七（一九〇四）年頃にさかのぼり、⁽¹⁶⁾「当時、世界の新聞といわれていたロンドン・タイムズ、モントリオール・ウィットナスなどに、しばしばデンマークの農村教育のことが紹介され：日本の一部の人々の目にとまっていた。」のである。大正時代・昭和前期にかけて我が国では農村の文化的向上・改善・新しい農業技術の導入といった「農村の近代化」が議論されていくなかで、一八六四年の敗北から立ち上がって、世界の工場・英国の朝食を賄うまでに至ったデンマークの農業の発展を話題にし、豊かな農業立国デンマークの成立に学ぼうという機運が高まっていた。そこでは、英・独などで現れた「デンマーク農業の繁栄ぶりへの関心」からデンマークの農業協同組合活動が注目され、ドイツ人ホルマン（A. H. Hollmann 一八七六—一九三六）の『デンマーク国民高等学校とそのデンマーク民族文化に対する意味 Die dänische Volkshochschule und ihre Bedeutung für die Entwicklung einer völkischen Kultur in Dänemark』（一九〇九）が単に『国民高等学校と農民文化』（那須皓訳、同志社 一九一三年）と銘打って翻訳されたことに発する、わが国独特のデンマーク・イメージが形成

されていくことになる。農業立国デンマークの基盤を「国民高等学校」と邦訳されたフォルケホイスコーレ folkehøjskole という（一般庶民を対象としたが、結果としてその八〇パーセントは農民であるために）¹⁶農村青年を対象とした寄宿制の農閑期を利用した短期教育施設に俄然求め、その思想的創始者グロントヴィイと実践者クレステン・コル（Christen Kold 一八一六—七〇）の二人の偉人にその功績を象徴化させ、農業の技術的・実際的要求が精神論や因果律の単純な偉人伝に転嫁させることで集約されていった。すなわち我々、日本人には、歴史事象を単純化させて、特定の人物に時代状況を象徴化させてしまう傾向がある。特にグロントヴィイについての記述では、北海道の出納陽一が「一八四八年独逸と事を構」えた後、「グルントビーの丁抹協会が盛大となるに連れ、各地に普及散在せる会員によりて漸次国民高等学校思想が了解せられ一八六四年独逸との戦後、愛国心の激発と相俟つてこれが創立熱勃然として起こるに至りました」（三八七頁）と記し、結びに「今日燦然たる丁抹の農民文化、崇高なる農業精神は実に彼の人格の顕現其物であらねばなりません、彼は実に丁抹の偉人でありました、否世界の偉人でありました」（三九〇頁）とした（『丁抹の農業』一九二五年¹⁷）。一九二六（大正一五）年の財団法人「協調会」発行の『丁抹に於ける農村の更生と教育』では、「今を距る八十年前、丁抹国民が未曾有の危機に際会するや、猛然たるグルントウイッヒの獅子吼、忽ち全国民を激励し、緩急事に応ずるの意気を祖国興復の一点に集注し、其

の実現は国民の聡明を進め精神の態度を確立するに在りとして、自由創造と農業改善の途に精進せしめ、遂に燦然たる北欧文化の光輝を發揮して、今日の盛運を開くに至れるは、実に其の提唱に係る国民高等学校教育の賜に外ならない」(凡例、一頁)、「六十年以前には是等の地方の人々は、大部分旧慣を墨守する百姓であつて、先是北欧ナポレオン戦争の敗北を恢復せんとする、多年臥薪嘗胆の苦心効なくして、意気全く沮喪し、殊に当時又プロシヤと戦つて大敗し、遂に南方シュレスウィヒ、ホルスタインの二州を奪はれて、再び起つ能はず。殆ど悲惨なる運命の波のまにまに翻弄されて居つた。果然国民一旦の奮起は、遂によく此の難関を突破し、物質的繁榮及精神的文化に於ける異常なる長足の進歩を遂げて、現時の隆昌を見るに至」(四頁)と続き、さらに「国家興隆の秘鍵」として「結局『それは国民高等学校の榮譽ある効績に帰すべきものである』の一語に尽される」(六頁)とした。

そういう状況下に戦後のわが国の特徴的「デンマーク論」に先行する形で注目すべき人物は、「恩師——内村鑑三先生を通じて彼地の教育と文化とに少なからざる関心を持つて」デンマークを訪れた松前重義(一九〇一—一九二)であり、彼は一九三六年に『デンマークの文化を探索』(向山堂書房)を著した。すなわち、「敗戦後」という共通の時代状況のなかでグロントヴィと、内村のダルガスとを、同じ土俵に並べたのである。その論法は以下のようなのである。「一八〇七年の丁独戦争により、デンマークは此のホルスタイン州

を奪はれ、一八四八—五〇年の戦に於いて尚又シュレスリッヒ州を奪はれた」(四頁)とは、まったくありえない戦争の存在といった意図的な事実誤認があつたものの、欲しいのは「国家艱難の秋と言ふが戦敗に勝る艱難はない」の文脈であつた。したがつて文章は続く。「併し乍ら神はデンマークを捨て給はなかつた。神はこの秋に当り、此の地に多くの愛国の戦士を送つて、此の国の進むべき道を示し給ふた。工兵士官ダルガス大佐は、『外に失ひしものを内に得ん』がために、北部ユランの地に人力を以てしては不可能とせられたる植林事業と湿地埋立事業を起し、其の国民的運動を興した。次いで、グロントウキ出で、其のルーテルの流れを汲む福音主義的キリスト教の信仰に基いて、今日の国民高等学校を提唱して平和的農業立国の礎をすゑた。其の弟子クリステン・コール、ルドウキツヒ・スクレーダー等は、彼の教によつて勇敢にも辛苦艱難国民高等学校を興して、今日の世界に冠たる農村の捨石となつた(傍点筆者)」(四—五頁)と。別の箇所ですべて「彼等は剣を以て外と戦はずして鋤を以て内を耕した。キリスト教の信仰と教育を礎として、ダルガスの植林開墾事業、グロントウキの精神的開墾業に始るデンマークの復興事業は着々其の緒についた。而て今や茲に美はしの地が生まれた」(二八頁)と松前は記してもいる。

ところが、実際には、グロントヴィがダルガスよりはるかに年長であり、第二次世界大戦後に我が国の敗戦を経験して、内村の系譜をひく人々が教育界に影響をもつてくるとき、内村の「遺言」ある

いは「預言」として『デンマルク国の話』の再話を積極的に行ない、そこでは「内村のダルガス」と既に「知られている」グロントヴィ・国民高等学校との並立、及びその時間的整合性を図らねばならなくなっていくのであった。たとえば、大谷英一は『平和の国デンマーク』（弘文堂、一九四八年）のなかで「豊穰な土地、シレスウィツヒ・ホルスタインを失うことになった」、「グロントヴィ精神がようやく勃然として国民の胸に訴へるやうになったのもこの時である」、「故内村鑑三先生を感動せしめたダルガスが、グロントヴィの精神に感じて、立ち上がったのもこの時であった。彼は復員の軍人、工兵大佐であつた（傍点＝筆者）」（四九頁）とした。また、大正期にダルガスとは無関係にグロントヴィを紹介していた前述の出納陽一でさえ、「戦後」の状況下で、グロントヴィとダルガス関係の「独自の『辻褄合わせ』を行なっている（『デンマーク復興の父グロントヴィ伝』日本基督教団、一九五三年）。「一八六四年プロシャ、オーストリア連合軍との戦はデンマークの敗戦に終わつて、豊かなシユレスウイ地方を割譲するの余儀なきに至つたが、翁（グロントヴィ＝筆者）はなおも国民を激まして、『外に失つた所を内に得よ。』『青年たちの脳裏開拓の余地が広い。』と説いて、ますます国民高等学校運動を強調した」（二二〇―二二二頁）、「『外に失つた所を内に得よ』の標語を具体化したものに、有名なダルガスの植林事業やユーランド泥炭地開発事業がある」（二二二頁）とした。

そして、それらが全く揺るがないイメージ、あるいは文脈として

人々の脳裏に定着してしまった理由は、『デンマルク国の話』をデフォルメした少年少女向けの伝記物語の存在であり、それらを根底にしたストーリーの小・中学生用の教科書への掲載である。前述の高橋健二が、今度は吉田甲子太郎編『新編・日本少国民文庫五』（新潮社、一九五六年）内に「デンマークの二本の柱——グロントウィーとダルガス」（七二―九一頁）を書き、中身は前述の彼自身が内村の『デンマルク国の話』を換骨奪胎したストーリーの「緑のデンマーク」を再話し、その前に「ダルガスが植林事業をはじめる前に、人を植える大事業をこつこつやっていた大学者グロントウィーがいなかったら、ダルガスの事業はけつして芽をふくことさえ、できなかったでしょう」（七三頁）とし、「グロントウィーの精神的な下ごしらえがなかったなら、ダルガス的大がかりな土木事業はなしとげられなかったでしょうし、ダルガスの国土改良がおこなわれず、農業がさかんにならなかったら、グロントウィーの精神も栄えるわけにかなかったでしょう。」（七四―七五頁）などと語っている。これが、土岐善麿編『中学国語 一年上』（中教出版株式会社、一九五八年）に掲載された（二一八―一三七頁）。また、小林勝の「木を植えて国を救ったエンリコ・ダルガス」が『光を掲げた人々』（日本放送協会、第五卷ヨーロッパ編二 一九五四年）に掲載され、そこではダルガスとほかの登場人物とが「本物のような会話」をして、さらに真実味をもったストーリーが展開される。モアヴィレが——ありえないのだが——かつてコペンハーゲンの士官

学校時代のダルガスの恩師として登場し、敗戦後間もない時期に道で出逢ったダルガスに「あなたは、モアビル先生ではありませんか」と呼び掛けさせ（一四九頁）、また、「十八才になった息子のフレリックが、顔色を変えて、飛んで帰ってきました。『お父さん、わかった』『何がわかったのかい、フレリック』『とうひがなぜ伸びないかということですよ』『なに！』」ダルガスは、はつと緊張しました。フレリックは、一本の枝を父の前につきつけました。（一六〇頁）と会話が進む。その場面は金田一京助編『中等国語一下』（四訂版）（三省堂、一九五六年）の十章「すぐれた人々 二 国を興したダルガス」内に、フレリック少年が小枝を掲げて、学者然としたダルガスの書斎に走り込んでくる挿絵（一二二頁）とともに掲載されているのである。この時期、それらとともに内村、大谷のデンマーク関連の文章が中学低学年用の国語教科書等につきつぎと掲載され、⁽¹⁸⁾ 当時はそれらの内容を猜疑心をもつて見つめる教師も生徒もいなかったであろう。まさにそれらは、国の検定を経た教科書に載っている「真実の話」として、一般の人々が受け止めることになって当然である。そしてそれらでは、Schroderのカナ表記を「スクレーダー（本稿では、スクレザ）」と記しており、現実⁽¹⁹⁾にデンマーク帰りの平林や大谷らが、かなりの情報を伝えており、我が国におけるデンマークに関する知識は増えたものの、逆に彼らを持ち帰った情報を吟味する必要がある。たとえば、例として単純な誤りを指摘するならば、高橋は「その上、雨の多い日本よりもま

「外に失いしものを、内にて取り戻さん」考

だずつと雨の多いデンマークのこととて、…」（九〇頁）とまったく事実⁽²⁰⁾に反することを記し、一方、会話等の場面を増やした小林は「それにしても、ダルガスの立派な伝記が、まだ日本で書かれていないことは残念なことです。或いはこれが、一番詳しい紹介になるかもしれません。」（一四八頁）と書いている。しかし、完全な誤記はともかくとして、それらにデンマークに何らかの「種本」が存在したとしたら、どうであろうか。

最後に紙幅の関係上、舌足らずとなりそうだが、可能性のありそうなところを論じておきたい。

六

デンマークで「外に失いしものを内にて取り戻さん」のフレーズは明らかに巷間で生きており、それを口にした途端に中年世代以上は「あのダルガスが言った…」と続くのであるが、使われ方は「軽妙な常套句」といった類似であり、そこには我が国でデンマークの過去を紹介しようとする際にイメージされる国家存亡にかかわる「運命的重さ」はないと言つてよいだろう。たとえば、インターネットで探しただけでも多くのヒットがあり、たとえば、北シエラではスウェーデンからの観光客が減ったことに対し、あのダルガスの『外に失いしものを…』のように、国内の日帰り観光客を増やそうといったものであったり、北ユトランドにあるデンマーク

陸軍のスキーズェ駐屯地発行の雑誌『先遣工兵隊 *Pioneren*』には、その兵營にかつてあつた有名なダルガスが工兵として勤務していたということを記す際に、見出しには「外に失いしものを…」と記し、記事そのものは新たにダルガスを論じようとするものではなかった(二〇〇九年二月)。

こうしたダルガスへの関心・言及が、それではなぜデンマークの社会に存在してきたのであろうか。筆者は、アスコウ・ホイスコーレ Askov Højskole の創設者ルズヴィ・スクレザ (Ludvig Schrøder 一八三六—一九〇八) の存在に注目している。⁽²¹⁾ 彼は若くしてグロントヴィイの思想の影響を受け、グロントヴィイ主義者と交流、コルの学校思想を实践する形でホイスコーレに関わり、一八六一年にデンマーク最初のホイスコーレであるレズィング・ホイスコーレ Rodding Højskole の教員(代用教員)、後に校長に採用され、六四年の敗戦によってその地がデンマークから分離されたのち、六五年新国境に接したアスコウの地に「コルに倣つて」ホイスコーレを創設、校長の「講話(講演)」が多大に生徒に影響を与えるシステムを实践した。日々行なわれる講話の实践という形でこのアスコウ式の校長⇨生徒関係が、その口述等が書物等のいわゆる『ドキュメント』として書面に残らない、口頭による伝達の形式で実現されることになる。そこでは、校長の興味に則った恣意的なテーマが日々選択され、まずは彼らの絶対的関心の所在であるグロントヴィイ、祖国、その祖国の今日的话题が語られ、特にアスコウを初めとした

ユトランドに位置するホイスコーレでは、敗戦、喪失した国土「南ユトランド(南ユラン)の地」、喪失した地にすむ同胞、ダルガス、ヒース開墾等が、ユトランドという「ご当地的话题のテーマ」として相当積極的に語られていたのであろう。そしてユトランドのホイスコーレの側が積極的に「ヒース協会」を絡めて語っていた状況が、スクレザを通じて作られていったと考える。人々への影響力の強いスクレザは、その後半生、ヒース協会に積極的にかかわり、一八九〇年に協会の「代表委員」のひとりとなり、一八九四年ダルガスの死後に協会の最高決定機関「三人理事会」の理事に昇格している。要するに彼はヒース協会の当事者であり、ダルガスを語る「資格」のあるものと言わば万人が認める人物であった。「ホイスコーレの教員たちが自身のホイスコーレで、あるいは校外の集会でヒースに関わるテーマや、それに関わる人物を話題とするとき、スクレザの三つの作品を資料として利用する。すなわち、『デンマーク・ヒース協会一八六六—一八九一—一つの試み』『エンリコ・ミューリウス・ダルガス——伝記物語』『ヒース協会の活動とその農業への影響』であり、一九〇七年の(現オスロの)クリスチャニアで開かれた第三回北欧農業会議に彼が準備した論文もある」とクレステンセン⇨ラナスが一九一六年に発行された「ホイスコーレ」に関する書物内で記しており、⁽²²⁾ 筆者は現段階ではまだ読む機会を得ていないが、後日、それらを確認するつもりである。ただ、クレステンセン⇨ラナスがダルガスとホイスコーレの関係

を肯定的に記す記述を載せているにもかかわらず、そこでは、明らかに一八八九年四月二三日（ダルガスの妻の甥がスクレザの娘との結婚式の日）まではダルガスが「反ホイスコーレの立場」をとっていたと記している（s. 147）ことは重要である。筆者の推測では、その理由はダルガスが前述のエストロプの国防政策を支持し、その「緊急予算法」の執行を肯定していたのに対し、ホイスコーレの教師たちは——また若き農民である生徒たちはその影響下で——エストロプに反対する、²³急進的傾向をもつ²⁴左翼党の支持者であったことと関係している²⁵と見る。そういった事情の理由は、ホイスコーレ側の立場からは論ぜられず、またクレステンセン＝ラナスは次のような微妙な表現を残している。「一八六五年ダルガスはシルケボーの集会に出席した。ここで彼は言った。意志と感情を実行に移すことが肝要であると。そして彼はさらに表現したはずである、外に奪われたものに内における代償を探すべきである。」（s. 146, 147）

すなわち、デンマークの独特な教育システム——十八歳を過ぎ大人になってから庶民が農閑期に通う国民高等学校の存在——、²⁶その教師らは史料批判を前提に歴史学を学んではいなかったこと、²⁷「歴史」を人間形成の指針を示すべきものにとらえていたこと、「講話」を教育の手段として積極的に持ち込む教師（校長）から生徒に向けられた知識伝達（oplysning）——「対話」形式をスクレザは採らなかった²⁸——といった状況、さらに一世代前のデンマーク

人の誰もが学んでいて、いわば「デンマーク人なら誰でも知っている」歴史ストーリーを「物語る」ことをもってデンマークの「国史」が小・中学校で子供たちに伝えられてきたこと、そして、そこで使われる教科書も、専門的歴史学研究者の著作ではなかった。以上のことなどが、本稿の問題と関わっていると言えよう。いわゆる「学問」としての歴史と一般大衆が常識的に考える「歴史」との間になら大きな乖離があったのである。その現象のひとつが、ここで論じてきた「ダルガスの神話現象」であり、そうした背景があるなかで、我が国の「ダルガス論」が存在しているのであると、言えなくはないであろうか。

註

- (1) Knud Andersen, *Vor egen historie* 3. P. Haase og Søns Forlag 1985. s. 144. 記念メダル（表・裏）写真掲載。
- (2) 薬師寺朔は、一九八三年、「『外で失ったものを内で獲得しよう』というモットーは、詩人であり、当時のデンマークの王立劇場の舞台監督でもあったハンス・ピーター・ホルスト（一八一―一九九三）が、彼自身戦争に参加した経験から作った数多くの詩の一節であるが、この詩句はダルガスの運動と結びついて、当時のナショナル・スローガンとなった」と記し、そのモットーをダルガスが言ったものとは記さなかったものの、「内村の」ダルガス論から生じる問題点については何ら論じていない。（薬師寺朔「デンマーク農村文化の日本への影響——酪農・教育・キリスト教——」7 内村鑑三の『デンマルク国の話』とダルガスの教訓」『松前文庫』No.33. 一九八三年、二九頁。）
- (3) 坂本勇は、一九八六年、興味深い事実を紹介している。「明治四十年代

となると各地の農村経営講習会などでデンマークの農業や産業組合についての翻訳が雑誌だけでなく単行本としてもでてくるのであった。『明治四十五（一九一二年）四月十五日、有斐閣書房発行の佐藤寛次補訳『農業振興と産業組合』（原書『The Organization of Agriculture』 by Edwin A. Pratt）について述べたい。この本は訳者の『序』にあるように…『中央農事報』（明治三十八年三月六十号から同年十二月六十九号）に連載した『英国農業組織論』を骨子としたものであった。その六十三、六十四号に「丁抹（国）農業事情」（上・下）があり、単行本（二十四、四十頁）の内容とは同じである。ここには国民高等学校についての記述はないが、ダルガスらのヒース協会についての紹介が出ている。内村鑑三の『デンマルク国の話』に先立つもので、引用しておく。〔略〕…戦争あつた翌年、此等不毛地開拓問題を解釋する目的で、當時の一大愛国者大佐ダルガス氏は、丁抹荒地整理協会を設立して、初めて其の地方に道路を設け、灌漑の計画を立て、内地殖民地を設定し、鉄道を敷設し、植樹を整理したのである。…〔略〕と（坂本勇「明治期のデンマーク文献（邦文）―農村事情・協同組合・国民高等学校―」『松前文庫』No.47、一九八六年、三八―三九頁）。内村の『デンマルク国の話』よりも六年も前に、我が国に上記のように紹介されていたことを坂本は述べているが、そのこと自体が示すことは、内村自身によるダルガスに関わるストーリーの脚色性がより明確に表れていることであり、本稿において内村の作品が「始まりである」という所以でもある。また、多くの我が国のヒース協会を紹介する（邦訳）文献において「plantationを「内地殖民地」と表現してきたものを散見するが、それらは語義とおりの「植林地」である。

- (4) Har. Skodshøj, E. M. Dalgas, Udgivet af Det danske Hedeselskab i 1966. まえがきによると一九四三年にスコスホイはこの書を出版していたが、デンマーク・ヒース協会創立百周年を記念してダルガスに関する家族関係文書・書簡を用いたうえで同協会より新たに出版。
- (5) Carl Erik Bay, "Mellem kultur og politik, mellem magt og ret, Georg

- Brandes og forfættingskampen i 80'erne", s. 94. (Hans Hertel og Sven Møller Kristensen, red. *Den politiske Georg Brandes*, Hans Reitzel 1973)
- (6) 久米邦武編修『特命全權大使米欧回覧実記』第六七卷（博聞堂、一八七九年）。

「シユレースワイヒ「ポールスタイン」ヲ普国ニ附与スルコトナレリ、此戰ニ於テ噍馬ハ小ヲ以テ大ニ抗シ、衆寡敵セサルニヨリ、陸軍ハ力ヤヤ屈シタレドモ、海軍ハ未ダ萎ヘス、各国ノ仲裁ニヨリテ、和睦トナリタルモ、噍馬人ハ敢テ敗挫セリトハセス、是ニ於テ其強兵ノ名譽ハ益歐洲ニ顕レタリ、「ダニース人種ノ居住スル地ハ、今ニ粹勵業ヲ勉メ、屈強自奮ノ精神甚タ旺ナリ、独逸人ヲ恨ミ、九世必報ノ志慨ヲ存シ、人人ミナイフ我子孫ノ末ニ至ルトモ、敢テ独逸語ヲ操ラシメスト、其自主ノ氣慨ハ如此シ」（第六十七卷、一二九―一四〇頁）。

- (7) Dansk Historisk Fællesråd, Historie-online.dk kommentar "Når den gode fortælling fordrer hovedet på historikeren" (http://www.historie-online.dk/special/kommentar/kh_kommentar_samvirket.htm, d.26.5.2010)
- (8) 我が国のはとんどの書では、生没年の単純引き算で、享年六六歳としているが、没年の誕生日以前に他界しているため、六五歳である。（一八二八年七月一六日―一八九四年四月一六日）
- (9) 『高木謙次選集』第四卷「無教会史研究」、キリスト教図書出版社二〇〇六年、三六八―三六九頁。
- (10) 坂本勇「内村鑑三の書簡」『松前文庫』No.42、一九八五年、三〇頁。また、坂本は同書内で（三一頁）、「内村の著した『デンマルク国の話』については説明を要しないと思いますが、（本書内「長男フレデリック」は『長男クリスチャン』が正しいことのみ指摘しておきます）内村鑑三は…」とも正しく記している。
- (11) 例として八年生対象のデンマーク史教科書の記述 (Knud Andersen, op. cit., s. 145).
- (12) Sv. Cedergreen Bech, red., *Dansk biografisk leksikon*, Tredie udgave,

1979-1984 Bd.3, s. 541-542. "Dalgas, Christian (af Erik Helmer Pedersen)".

- (13) 例えば、一九八二年の朝日新聞紙上の特集記事「森を破壊したとき文明は死んだ」のリード文内の記述（論説委員辰濃和男による）。「国が戦に破れたとき、デンマークにもしひとつりのダルガスがいなかったら、こんなにちの豊かなデンマークはありえなかった。」とする文章。（『朝日新聞』朝刊第二部 一九八二年七月二十九日）

- (14) 高橋健二「緑のデンマーク」『六年生の国語 下巻』学校図書株式会社 一九五一年検定。

- (15) オヴェ・コースゴール・清水満編『デンマークに生まれたフリースクール『フォルケホイスコーレ』の世界——グルントヴィイと民衆の大学』新評論 一九九三年、序文。

- (16) 坂本勇「グルントヴィイ精神の再興を——生誕二〇〇年を迎えて」『松前文庫』No.36, 一九八三年、二四頁。

- (17) 北海道畜牛研究会編纂『丁抹の農業』一九二五年。

- (18) 吉武信彦「日本・北欧政治関係の史的展開——日本からみた北欧——」『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）第三巻第一号、二〇〇〇年、注（26）参照。驚くべき数の教科書掲載文章が存在していたことが紹介されている。

- (19) 平林広人『農民の国デンマルク』文化書房、一九二四年など参照せよ。また、前掲「座談会」の発言者らはグルントヴィイに関わる情報は平林によることを語っている。

- (20) "På jagt efter sjællandske turister -" (<http://www.drak/Regioner/Nordvestsjælland/Nyheder/Odsherred/2010/04.09/141110>)

- (21) A. Oppeermann, *Dalgas : Hedesagens Forekæmper*, Det schubothske Forlag, 1895. 「学生協会」が発行した「人気小書」シリーズの一冊で、煽情的な装丁の本書はダルガスの死の翌年に発行されたものの、ダルガスは冷静に語られ、ダルガスの「神話化」はまだ起きていない。「神話化現象」はこの後であり、ダルガスの死によってヒース協会の中核に入ってしまった

スケレザはまさに状況から見れば、そのキーパーソンとなる可能性が存在する。

- (22) J. P. Kristensen-Randers, "Højskolen og Hedesagen" i *Den danske folkehøjskole : En bog til fangelejerne* (Udgivet for Højskoler og landbrugsskoler, 1916) s. 147-148.

- (23) Se Schrøder, Ludvig i *Dansk biografisk leksikon*, Bd.13, s. 220.

- (24) Alfred Povlsen, "Historieundervisningen" i *Den danske folkehøjskole : En bog til fangelejerne* (1916), s. 27. Heri står der, "Professorforedraget, som har sin plads på universitetet, hører absolut ikke hjemme på højskolen."

- (25) Schrøder, Ludvig (af Roar Skovmand) i *Dansk biografisk leksikon*, Bd.13, s. 219.

